

# 武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪 I

若松良一

## はじめに

埼玉県行田市にある埼玉古墳群中の稲荷山古墳は墳丘主軸長120mの大型前方後円墳で、主体部の礫槨から出土した金錯銘鉄剣をはじめとする副葬品（国宝）の数々で有名である。また、人物、動物、家、器財、円筒、朝顔などの各種埴輪類が豊富に出土しており、関東地方における人物埴輪出現期の埴輪組成と埴輪が再現する葬送儀礼を知る上で第一級の資料といえる。

今日の発掘調査からすると、埴輪類がトレンチ法による部分調査であったことは、残念であり、今後の追加調査を待たなければ、その全体像を確定することはできないが、古墳の保存状態を把握することと副葬品及び埴輪類の検出を目的とする純然たる学術調査であり、昭和40年代の発掘調査の与条件からすれば、やむを得なかったことである。

すでに大部な正式報告書が刊行され、副葬品のほぼすべてが、詳細に公表されているほか、埴輪類についても、主要なものについては懇切な報告がなされているが、後者は小破片を含む全点の接合には莫大な時間を要することや紙面の都合によって、やむなく割愛された資料もある。

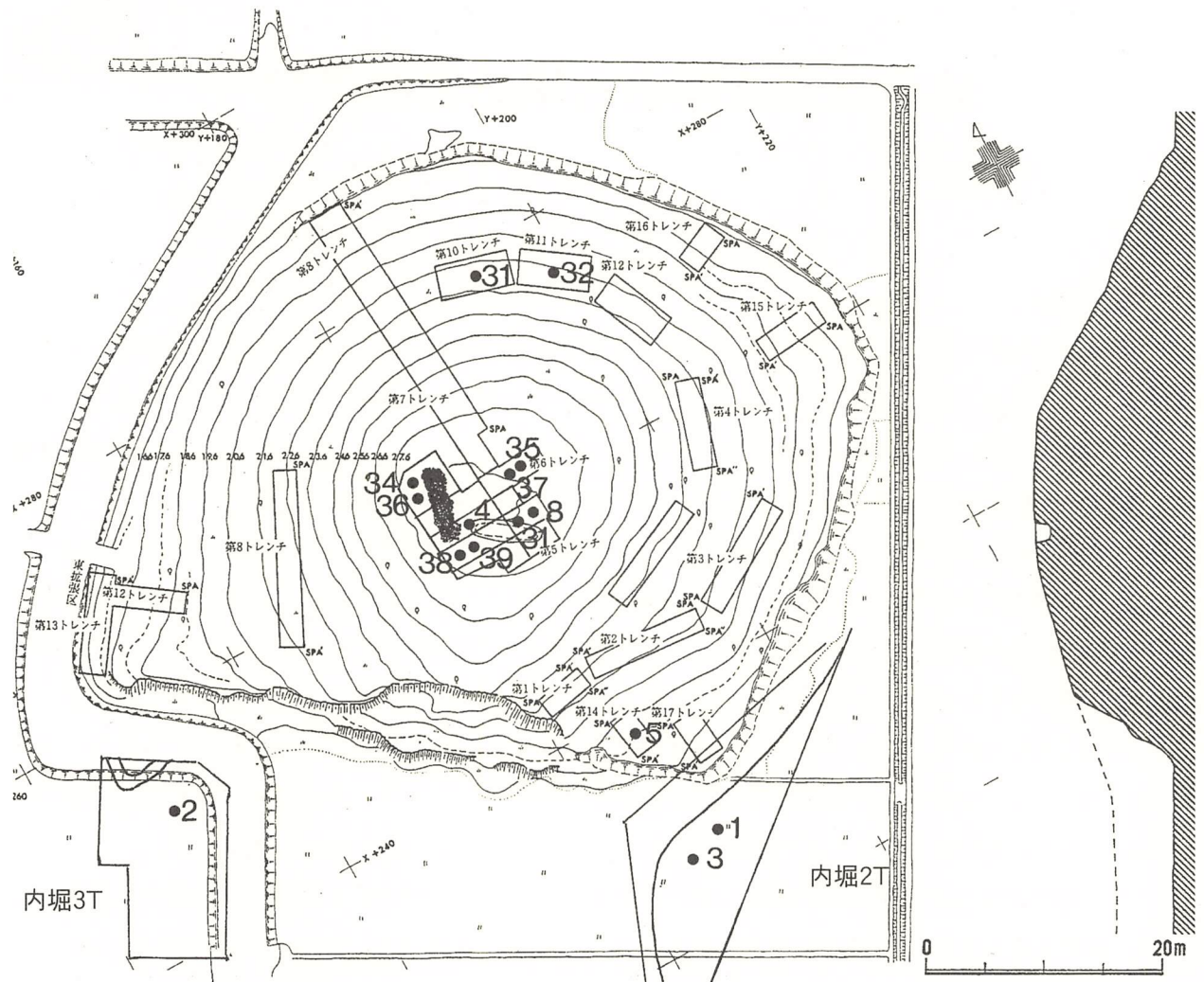
この資料報告は、県立さきたま資料館の常設展示の充実を目的とする日常の収蔵資料の整理、復原、修理過程において、新たに確認できたものと報告書に掲載されているが、復原作業が進展し、形状を大幅に変更したものを公表し、今後の活用と研究に資することを目的とするものである。数量が多く、整理に時間を要するため、今回は家形埴輪を報告し、次回以降、逐次、人物・動物などの形象埴輪を報告することにした。

## I 家形埴輪

### 1 家形埴輪の出土状況

今回報告する家形埴輪は原形のまま元の位置に留まっていたものではなく、破片になって墳丘や周堀の各所から出土している。取上げはトレンチ単位であり、ドット図も作成されていないが、出土位置と出土状況（第1・2図）を把握し、接合関係を追究すれば、原位置の推定も可能となろう。

墳丘部では、昭和43年度に主体部を検出する目的で設置された墳頂部の第6トレンチから家形埴輪片が5点出土している。第6トレンチは東西方向に設定しており、1区（資料番号35・37）はその東半部で墳頂部中央の稲荷祠のあった位置、2区北拡張区（34・36）は礫槨の北半部、2区南拡張区（4）は礫槨南端付近にそれぞれ対応している。第6トレンチと2mの間隔を空け、南側に平行して設置した第5トレンチでも4点の家形埴輪片が出土している。1区（8・31）はその東半部で粘土槨東側部と槨外東側に、2区（38・39）はその西半部で粘土槨中央部及び槨外西側に対応している。

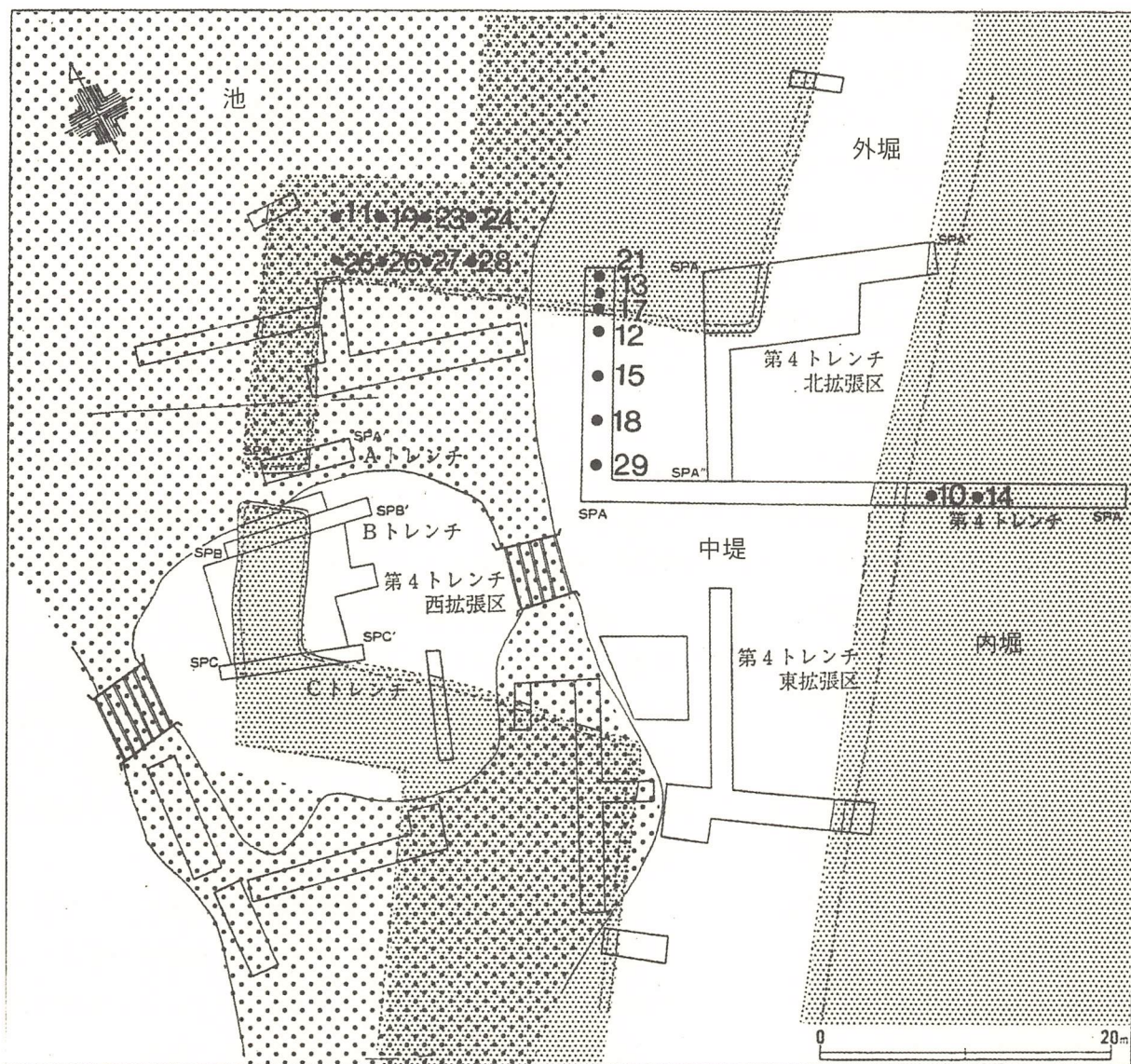


第1図 稲荷山古墳家形埴輪出土位置図（墳丘部）

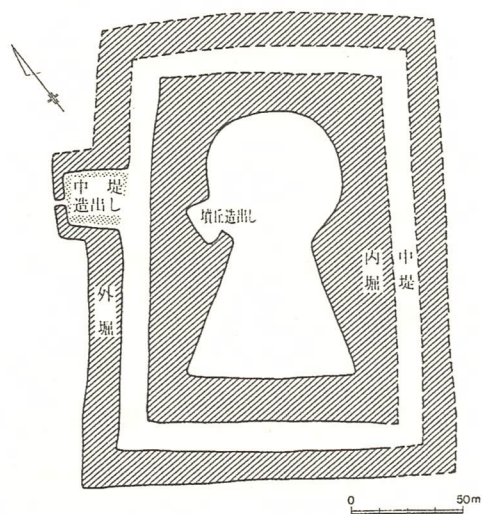
このほか、墳頂部では昭和58年5月に家形埴輪片が2点（7・30）採集されている。墳丘斜面部では北側中段テラスに設置された第10トレンチ（31）と第11トレンチ（32）で各1点、東側くびれ部に設置した第14トレンチで1点（5）の家形埴輪片が出土している。このうち資料番号31は墳頂部第5トレンチ1区出土資料と接合して完形の堅魚木となった。稲荷山古墳の主体部の覆土はわずか30ないし50cmほどしかなかったことから、墳頂部の盛土は雨水や季節風などの影響で大量に流失し、家形埴輪も斜面部へ転落したと考えて誤りないであろう。

墳丘裾部に接した位置では、東側くびれ部外側の内堀第2トレンチから2点（1・3）、西側くびれ部外側の内堀第3トレンチから1点（2）の家形埴輪片が出土しているが、くびれ部への家形埴輪の設置はないようなので、これらも墳頂部からの転落である可能性が高い。

家形埴輪片が集中して出土したもう一つの地点は後円部の西側にある中堤造り出し部付近である。第4トレンチの造り出し部に対応する部分からは4点（12・15・18・29）、外堀に対応する位置からは3点（13・17・21）、内堀に対応する部分からは2点（10・14）の家形埴輪片が出土している。この中堤造り出し部周辺からは稲荷山古墳出土家形埴輪の大部分が出土しているので、これらは人物や動物埴輪と一緒に中堤造り出し上に配置されていた家形埴輪の破片と見て誤りないであろう。



第1図 稲荷山古墳家形埴輪出土位置図2 (中堤造出し)



稲荷山古墳中堤造出しの位置

残念ながら、中堤造り出し部は発掘調査に先立って行われた園池の造成工事によって、西側の部分が掘削されたため、大幅な損傷をこうむり、橋掛かりの中島部分で一部が保存されている状況である。工事中に池から出土した埴輪は一括で扱われ、正確な出土地点は知るべくもないが、前記したように、もともとは中堤上に配置されていた可能性が高い。今回報告する資料には池出土品(11・19・23～28)の割合が高く、これらのなかに第4トレンチ造出部、同外堀、同内堀の各出土品との接合関係を有するものがあることは、この仮定の妥当性を証明するものであろう。

## 2 家形埴輪の特徴

稲荷山古墳出土埴輪はコンテナ箱に合計250箱あり、の中から形象埴輪を注意深く抽出して、分類作業を行った結果、家形埴輪片は合計50点ほどあった。根気強く接合作業を行った結果、これらのうちの一部は入母屋造りの家形埴輪上屋根部分2棟分として立体的に組み上げることができた。実測に耐えない小破片と特徴の乏しいもの若干を除いて、合計40点の実測図作成と写真撮影を行ったので、観察記録と合わせて、逐一報告することにする。

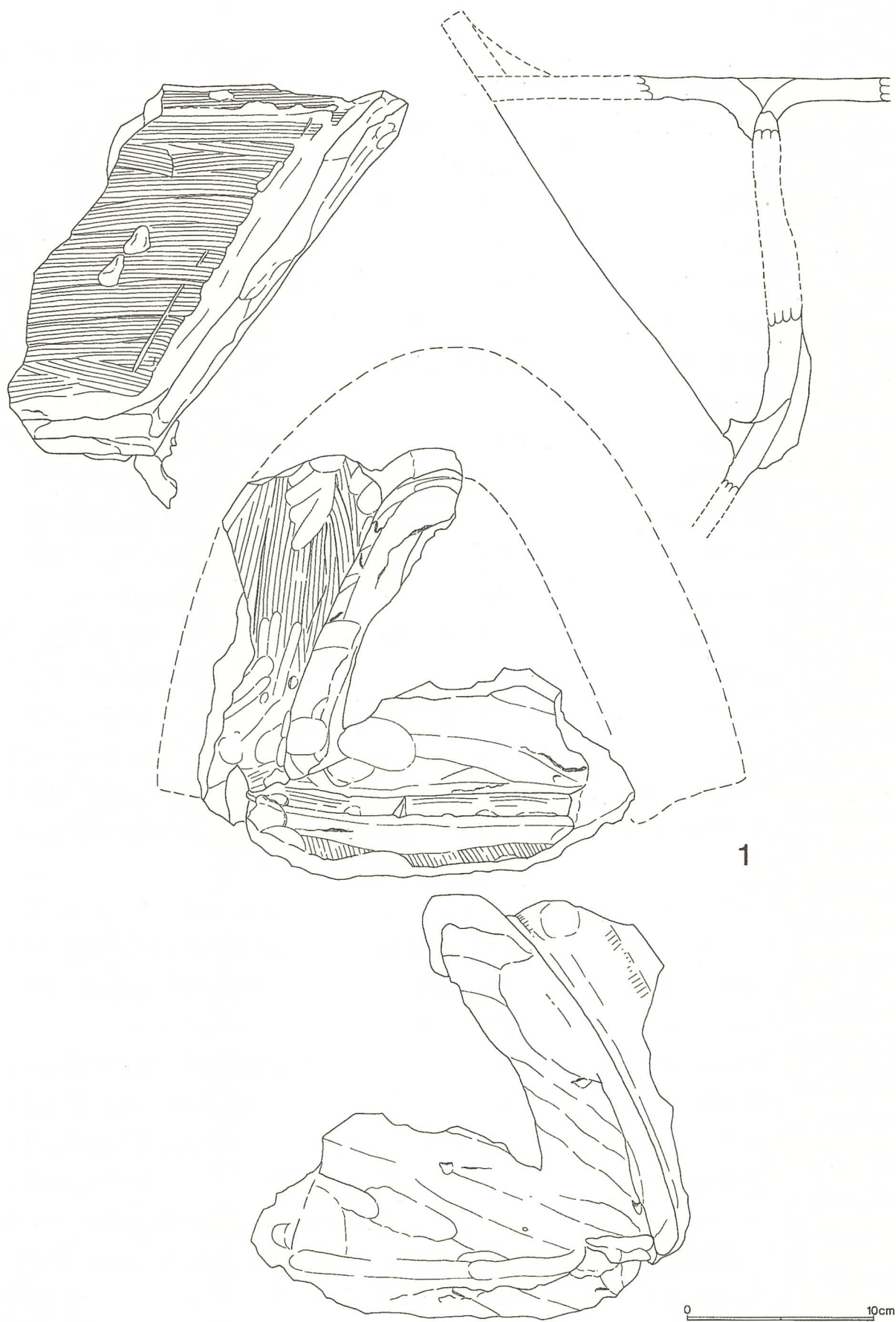
1は入母屋造りの上屋根切妻部分である。報告書には屋根部が掲載されているが、今回、妻の壁体から下屋根にかけた内堀2Tの注記がある破片が接合した。屋根の横断面形は大棟の部分が丸く、斜辺が内湾するため、ほぼ隅丸三角形を呈する。下屋根から連続的に母屋を成形し、その外側に切妻部を接合している。切妻部の張り出す角度は54度である。下屋根と上屋根の境界部は内面を幅の広い粘土帯で補強し、外面は妻側と平側の両方に凸帯を水平に貼りつける。凸帯は円筒埴輪に伴うものと共通しており、断面形は上面と両側面の内湾する台形である。切妻端部の側面には幅7.3cmの粘土板を貼りつけて、破風板を表現する。破風板を含む屋根最大幅の復原値は31.7cmである。棟木の表現は行われていない。下屋根と母屋は非板造りであり、平面形で隅丸方形に粘土紐を積み上げて成形している。調整は内面及び妻部外面はユビナデ、上屋根外面はヨコハケ（7本/1.2cm）、破風板外面はタテハケ（7本/1.4cm）、破風板内面はヨコハケ後、ナデ消し、下屋根外面はナナメハケ（8本/1.3cm）である。胎土には粗砂を少量含み、長石、白色パミス、酸化鉄粒、黒色軟質粒、輝石が観察される。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

2は1と同一個体の大棟部破片である。3T内堀の注記がある。横断面形は弧を描く。一方の端面にほぼ垂直な剥離痕があり、反対側で徐々に薄くなるので、母屋に取り付き、切妻部を形成していたとみられる。上面には幅2.1cmの直線的な剥離痕があり、鱗飾りが取り付けられていたと推定される。外面調整はヨコハケ（7本/1.5cm）、内面調整は棟方向と直交するユビナデである。

3は1と同一個体の、鱗飾りの付いた大棟部破片である。内堀2Tの注記がある。内面調整が雑で、粘土紐が十分綴じ合わされていないことから、外から手を差し入れられない母屋の部分に対応し、最後に閉塞を行った部分であることがわかる。鱗飾り板は厚さ1.2cmの平板なもので、ヘラ切りによって、斜辺が造られている。大棟の外面調整はヨコハケ（7本/1.2cm）、内面調整はユビナデ、鱗飾り板は横位のユビナデである。

4は1と同一個体の、上屋根母屋隅角部破片である。6T2区南拵2区の注記がある。端面をヘラ切りした粘土板を小口側に接合し、隅角の内側に補強用の粘土を貼り足している。外面には切妻部を接合した痕跡が残る。上屋根部分の外面調整はヨコハケ（10本/2.0cm）、内面は雑なユビナデである。焼成は良好で、淡い赤褐色を呈するが、器肉はくすんだ灰褐色である。

5は1と同一個体の、大棟部破片である。14T表土の注記がある。横断面形は弧を描く。上面には鱗飾りの剥離痕がある。内面調整が雑なので、3と同じく、母屋部分に対応しよう。外面調整はヨコハケ、鱗の付け根部はナデ、内面調整はハケ調整後、雑なユビナデを加えるが、天井部は補強用粘土を貼り足して、ユビオサエで閉塞を行っている。このことから、母屋部では最後に閉塞する



1

第3図 家形埴輪実測図1

部分以外は、手を差込んで内面の調整を行っていたことがわかる。

6は1と同一個体の、下屋根軒部破片である。注記は不明瞭で読み取れない。壁体に連続して屋根を成形し、軒部は後で貼り足し、下側に補強用粘土を加えている。外面下端部には幅の広い凸帯を水平に貼りつけて、押縁を表現する。外面調整は左上がりのナナメハケ（7本／1.3cm）で、下端部のみが右上がりのナナメハケである。内面調整は左上がりのナナメハケ後、同方向のユビナデを重ねる。軒部はヨコナデである。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

7は1と同一個体の可能性がある、壁体隅角部破片である。墳頂部昭和58年5月表面採取の注記がある。粘土紐の巻き上げ成形であり、内面に5段の接合痕が残る。隅角は丸みを帯び、粘土紐も連続している。隅角には垂直に高さ2.1cmの凸帯を貼り付け、次に水平方向の凸帯（高さ1.5cm）を平側と妻側の両面に貼り付け、最後にナデ調整を加える。外面調整のタテハケ（6本／1.1cm）を施した後に凸帯を貼る。内面調整はナナメハケ（9本／1.7cm）であるが、上部に行くにつれ、傾斜が緩くなり、雑なナデと指オサエを部分的に加える。焼成は良好で、外面がくすんだ橙褐色、内面が濃い赤褐色、器肉は淡い灰褐色を呈し、1とは内面の色調が異なる。

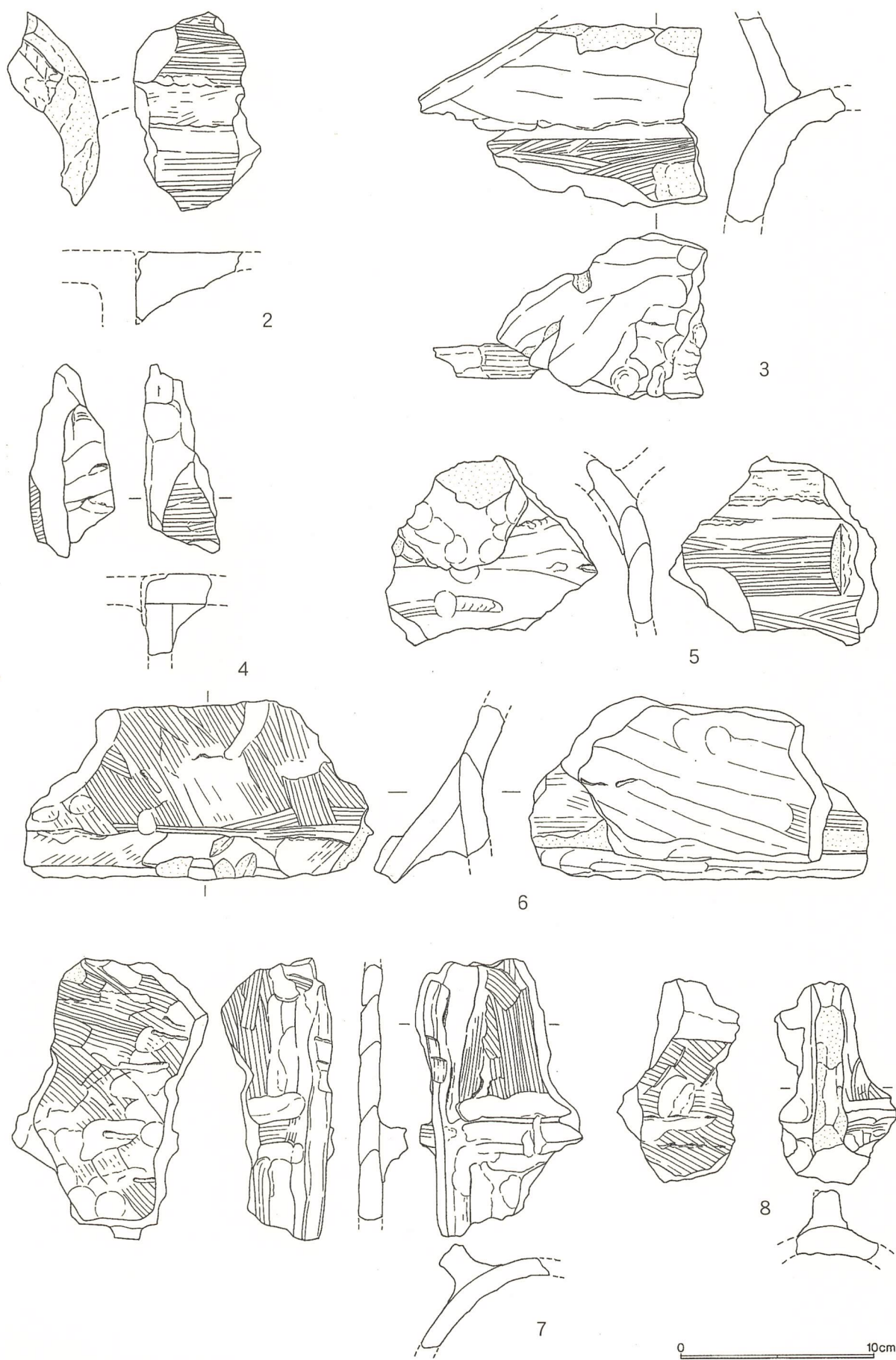
8は7と類似性の高い壁体隅角部の破片である。5 T1区表土の注記がある。隅角に垂直の高い凸帯を、妻側と平側に直交するやや低い凸帯を貼り付けている。胎土には粗砂を少量含み、白色パミス、チャート礫、酸化鉄粒が観察される。色調は表面が淡い赤褐色、器肉は茶褐色を呈する。

9は千木の破片である。外堀2 Tの注記があるが、実在しないトレンチ名であり、外堀4 Tの誤りである可能性が高い。幅4.5cmの破風板の頂部が交差して、そのまま千木となるが、左側の板を右側の板の上に重ねて立体交差する状態を忠実に表現している。交差部の下側は軒内側の頂点となるため、丸く成形されている。交差部裏面には大棟との接合痕らしき粘土塊が付着している。外面調整はハケ調整後、ナデを加える。千木先端部はヘラ切りが施され、平坦である。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、長石、白色パミス、酸化鉄粒が観察される。色調は表面がやや淡い赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

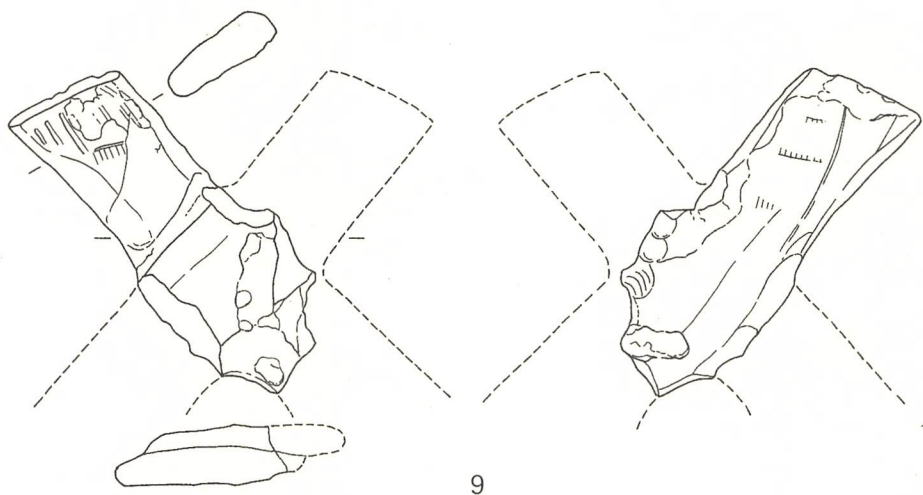
10は9と同一個体の屋根切妻部である。内堀4 Tの注記がある。切妻部の張り出しは直線的で、角度は60度を測る。屋根は横断面形が内湾する。切妻側端面には幅4.5cm前後の破風板が貼り付けられているが、内側にも接着面を作り、外側には補強用粘土を加えている。屋根の外面調整はヨコハケ、内面調整は斜位の雑なナデである。破風板の調整はハケ調整後にナデを加える。

11は9と同一個体の可能性がある、屋根大棟部破片である。池の注記がある。横断面形はへの字形で、頂部は丸みを帯びている。大棟上に平行して2列の障泥板が貼り付けられている。堅魚木の脱落痕が半円形に残り、これに接する部分で障泥板頂部は斜辺となっているので、平側から見た場合、障泥板は鋸歯状を呈していたことになろう。屋根の外面調整はヨコハケの後にナデを加える。内面調整はナナメハケの後にユビナデを加える。また、天井部内面には補強用の粘土塊が貼り付けられている。胎土は礫と粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色パミス、長石、輝石が観察される。焼成は良好で、表面は橙褐色、器肉はオリーブ灰色を呈する。

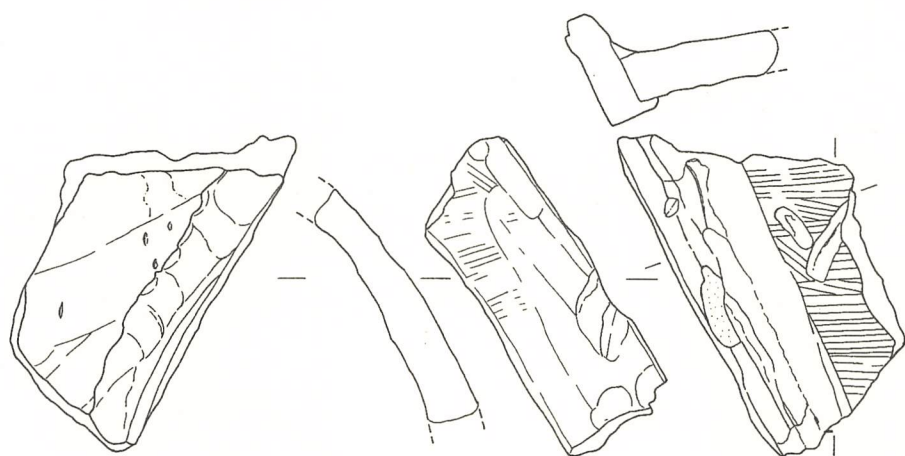
12は9と同一個体の可能性がある、上屋根部片である。造出部4 Tの注記がある。外面調整は簾状文的なヨコハケ（5本／0.8cm）、内面調整はヨコナデ及び横位ヘラケズリである。胎土は粗砂を



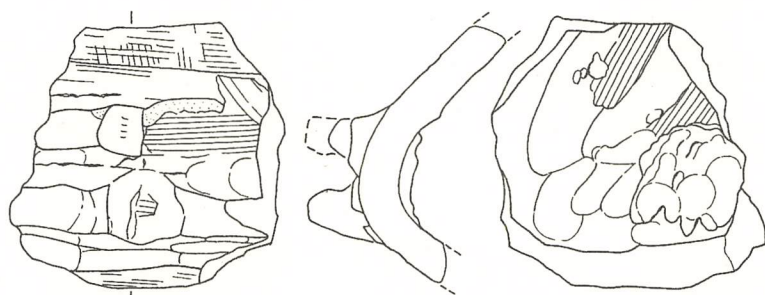
第4图 家形埴輪実測图2



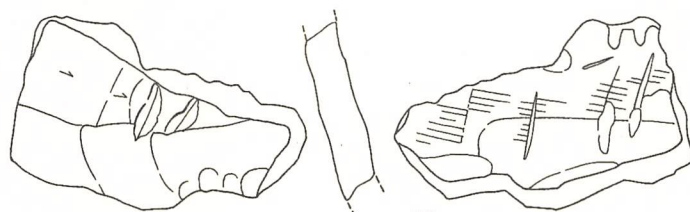
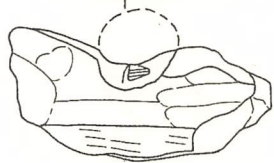
9



10



11

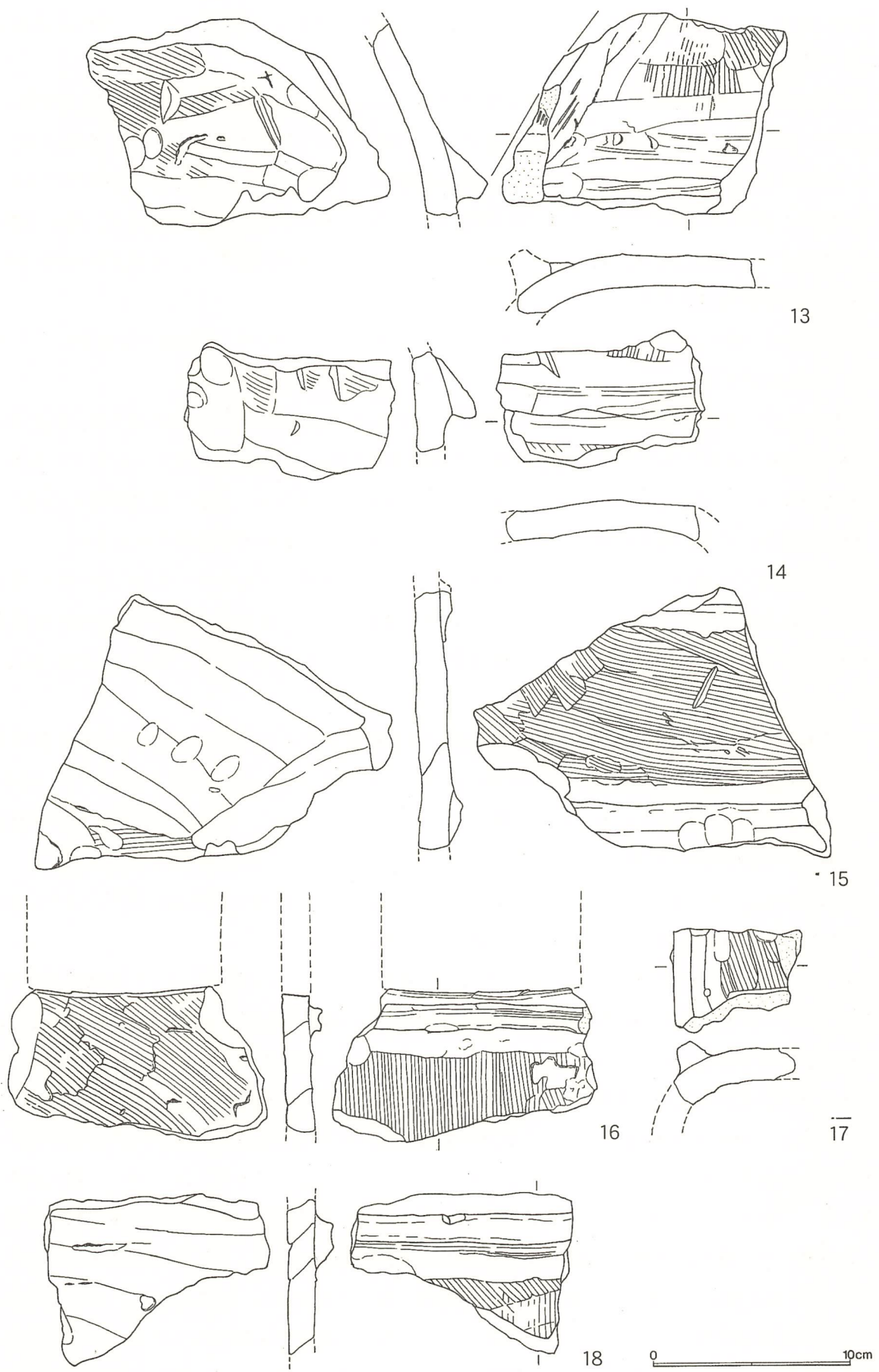


12

0 10cm

第5図 家形埴輪実測図3





第6図 家形埴輪実測図4

やや多く含み、チャート礫、長石、白色パミス、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成は普通で、少し粉っぽい。表面が淡い橙色、器肉は暗灰褐色を呈する。

13は9と同一個体の可能性がある、下屋根隅角部である。外堀4Tの注記がある。粘土紐巻き上げ成形で、隅角は丸みを帯びる。壁体から連続して勾配のきつい屋根を成形し、粘土を貼り足して出の小さな軒を表現する。隅角の稜線上には凸帯を貼って、押縁を表現する。外面調整はタテハケ(8本/2cm)後にヨコナデを加える。内面調整はナナメハケ後、斜位のナデを加える。胎土は粗砂をやや多く含み、白色パミス、酸化鉄粒、輝石が観察される。焼成は良好で、表面がやや淡い赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

14は13と同一個体の下屋根部であり、胎土、焼成、色調のほか成形、調整技法も共通している。内堀4Tの注記がある。

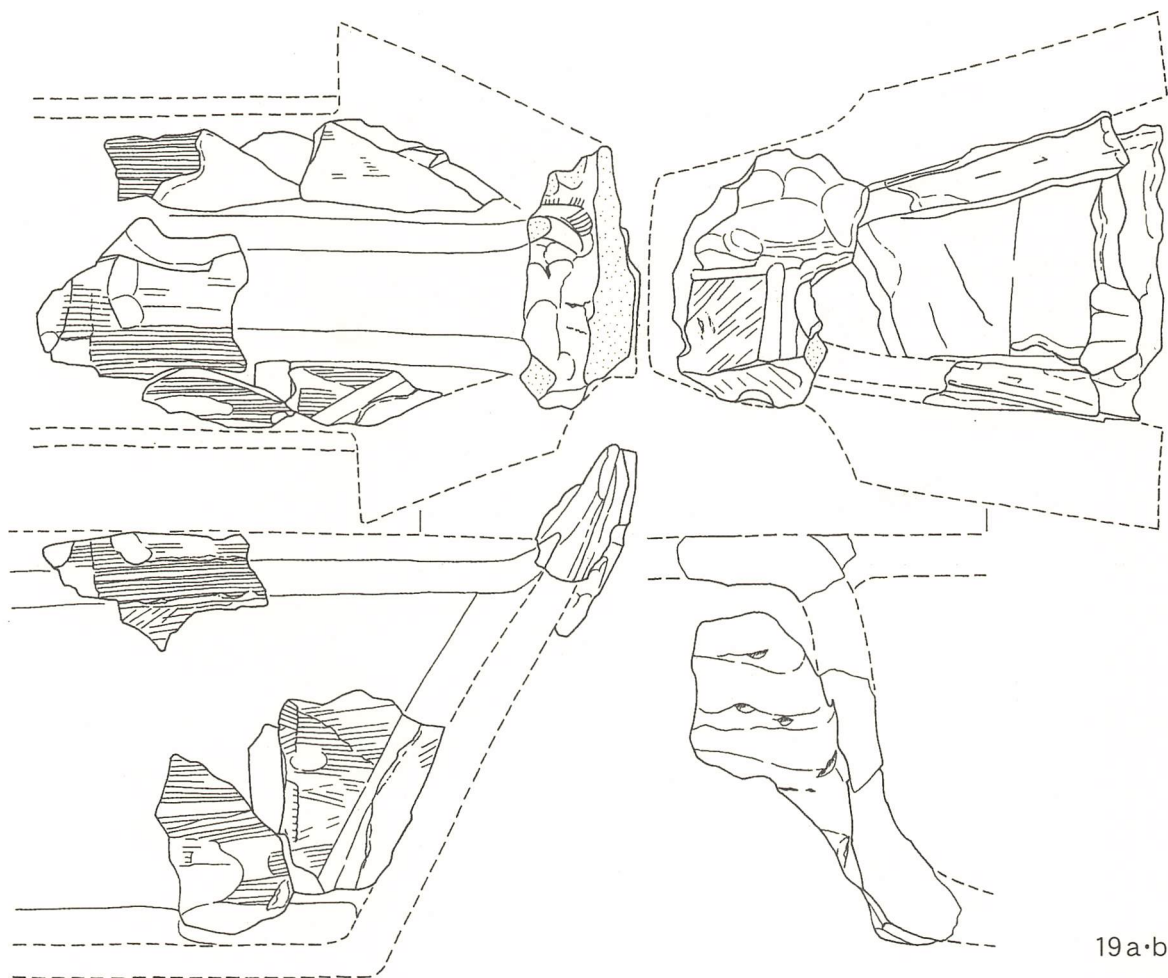
15は壁体部である。造出部4Tの注記がある。やや厚手の製作で、外面には2条の低凸帯が11.2cmの間隔で水平に貼り付けられている。外面調整は傾斜の緩いナナメハケ(12本/2.6cm)、内面調整はヨコハケ後に斜位のナデを加える。胎土は粗砂を少量含み、長石、酸化鉄粒、白色パミス、輝石が観察される。焼成は良好で、表面がくすんだ赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

16は方形窓を伴う壁体部である。注記が明瞭でない。粘土紐巻き上げ成形で、内面に接合痕が残る。水平に貼られた凸帯の上方に接して方形窓がヘラ切りされている。窓の幅は現存値で10cmを測る。外面調整はタテハケ(13本/2.8cm)、内面調整はナナメハケである。胎土、焼成、色調は15と共通する。

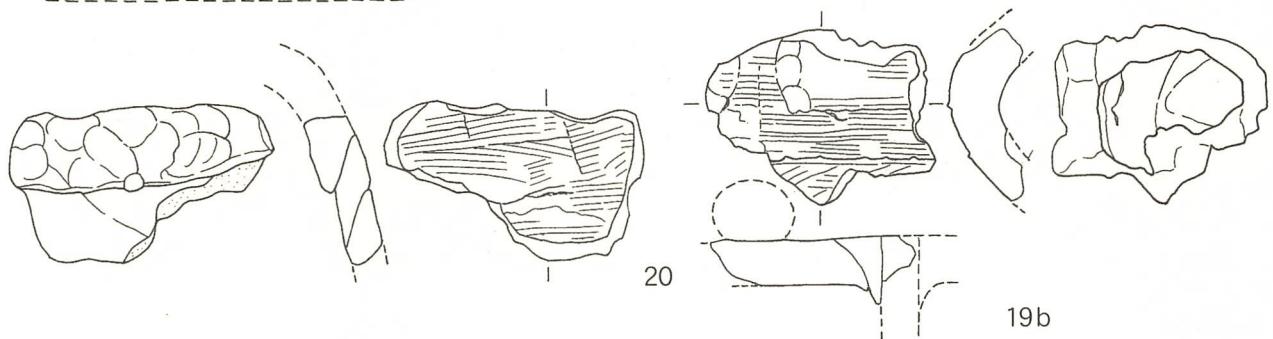
17は壁体隅角部である。外堀4Tの注記がある。粘土紐巻き上げ成形であり、隅角は丸みを帯びる。隅角上には垂直に凸帯が貼られている。これに直交してヨコナデの一部が確認できるので、水平な凸帯も貼られていたことがわかる。外面調整はタテハケ(4本/1cm)、内面調整は横位ナデである。胎土、焼成、色調は15と共通する。

18は15と同一個体の壁体部である。造出部4Tの注記がある。外面には断面M字形の水平な凸帯が貼られている。調整技法と胎土、焼成、色調は15と共通する。

19 a・bは入母屋造りの家の上屋根部である。切妻部分(a)と大棟部分(b)を組み合わせて復原を行った。ともに池の注記がある。下屋根に連続して上屋根母屋部分を粘土紐巻き上げで成形し、妻側の穴から手を差し入れて、内側の隅角部を粘土で補強し、最後に穴を粘土板で閉塞する。次に、端部をヘラ切り整形した三角形の板2枚を妻側に接合し、天井部を掛け渡して切妻部(張り出し角は60度)とし、端面に破風板を取り付ける。破風板は上部しか残存していないが、平面形が琴柱形になることが推測される。その上端部は粘土をユビオサエで伸ばして整形したもので、縁に向かって薄くなっている。中心部には幅4cmの長方形板を貼って、2材からなる破風板の継ぎ板を表現する。この継ぎ板の直下には棟木の脱落痕が半円形に残る。また、大棟上には3cmの間隔を置いて平行する2枚の障泥板と1個所の堅魚木の剥離痕が残る。屋根の横断面形は逆U字形で、扁平気味である。屋根の外面調整はヨコハケ(13本/2.2cm)、母屋の内面調整は雑なユビナデ、切妻部はハケ調整後にナデを加える。胎土は粗砂を少量含み、チャート礫、白色パミス、輝石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、器肉は還元がかっている。表面が橙色、器肉は暗灰褐色を呈する。

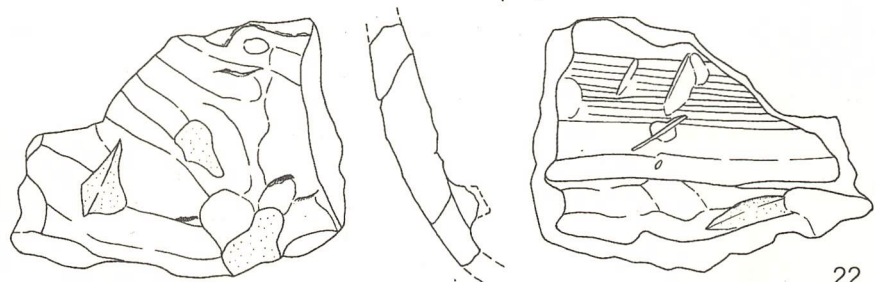


19a·b

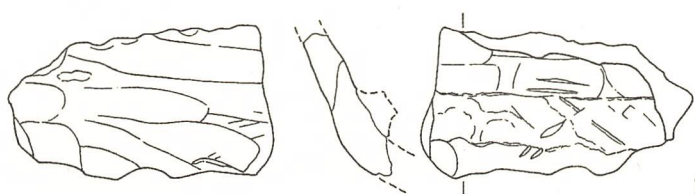


20

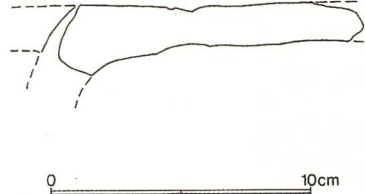
19b



22

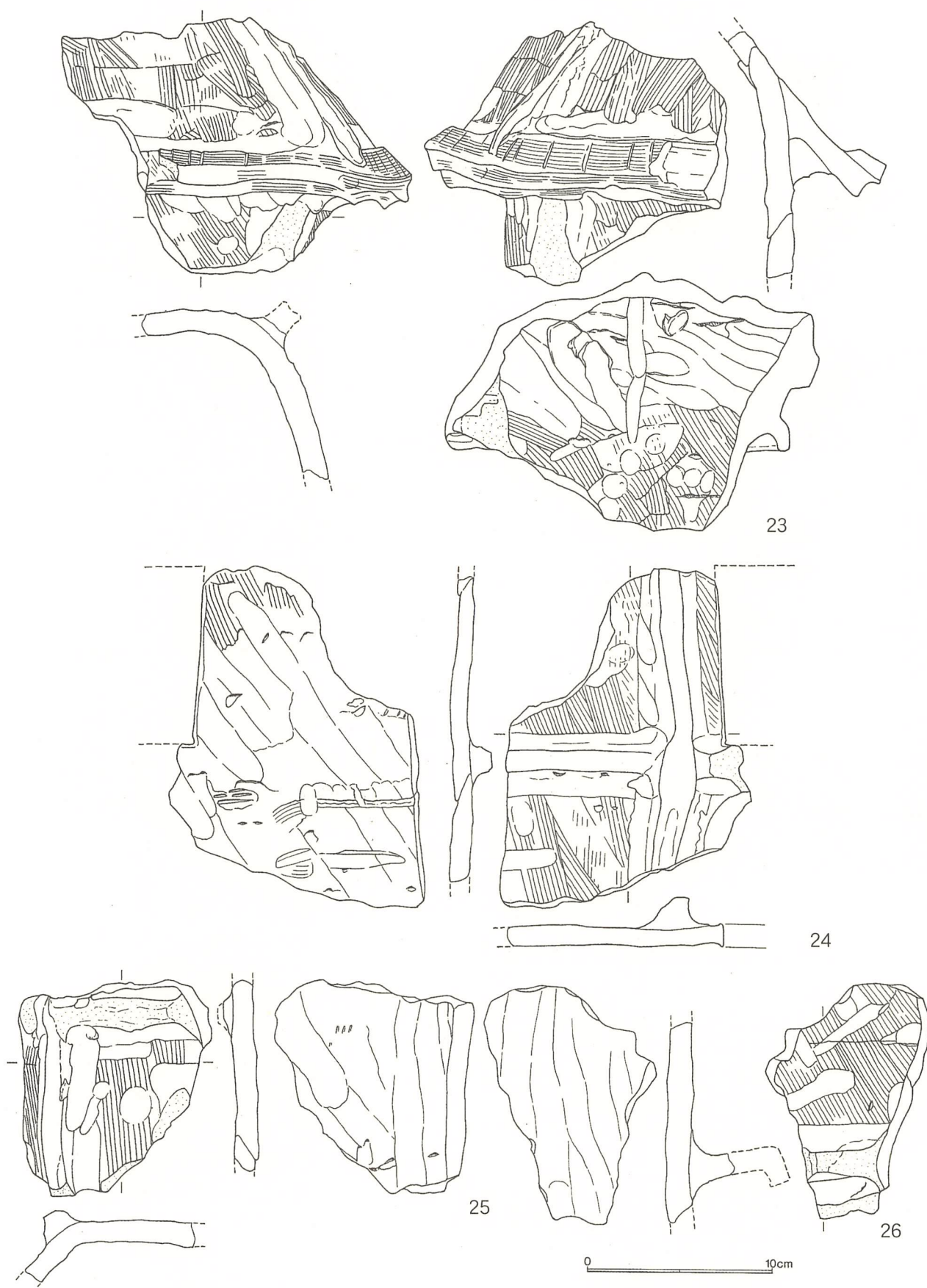


21

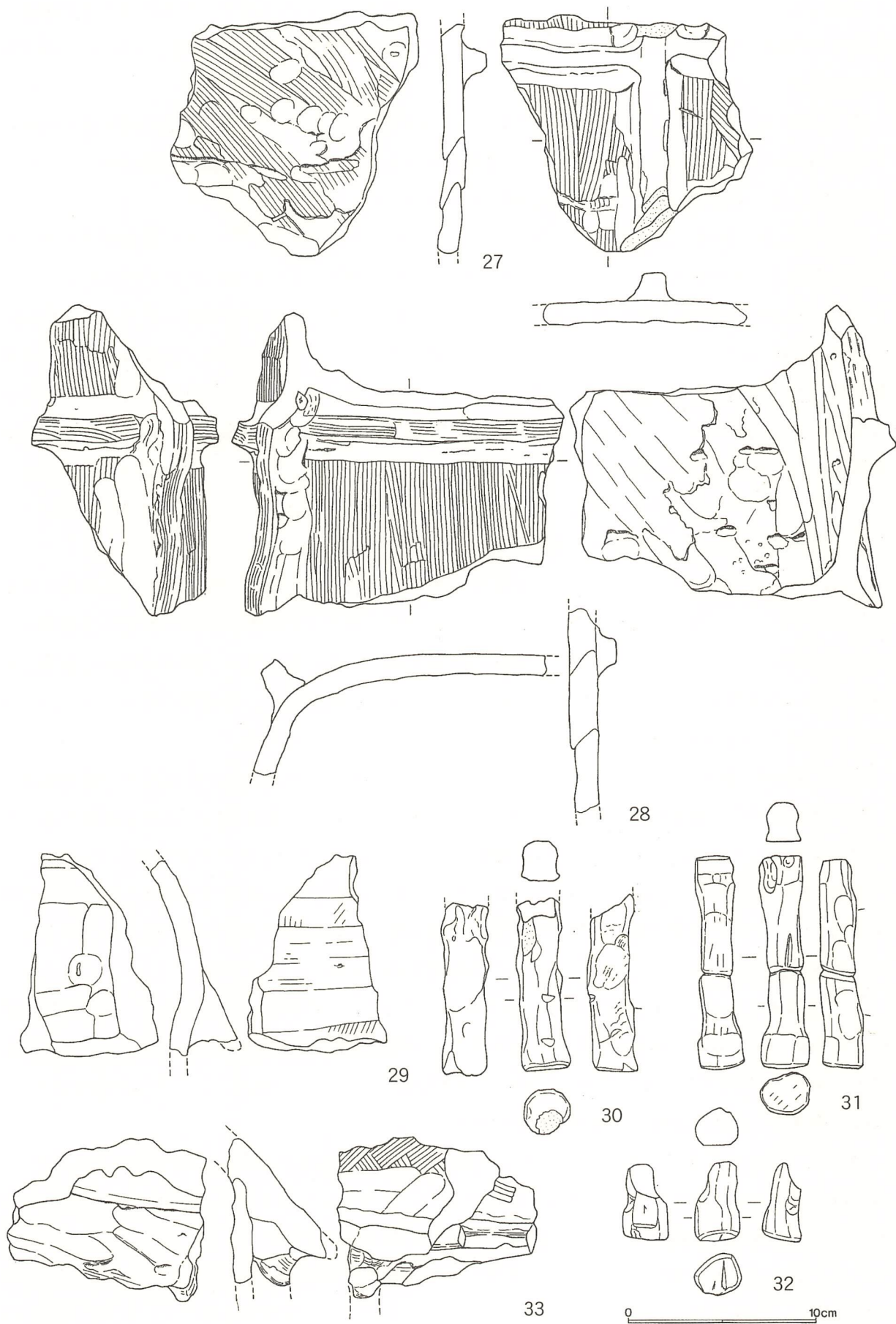


0 10cm

第7図 家形埴輪実測図5



第8図 家形埴輪実測図6



第9図 家形埴輪実測図7

20は19と同一個体の、上屋根部である。4 Tの注記がある。大棟に近く、内面には天井部閉塞用の粘土が内側からユビオサエで貼り付けられている。外面調整はヨコハケ（7本／1.2cm）、内面調整は斜位のナデである。

21は19と同一個体の、上屋根下半部である。外堀4 Tの注記がある。下屋根との境界部に凸帯の剥離痕があり、接着効果を増すためにヘラ先刺突が加えられている。下屋根は勾配が緩い。外面調整は横位ナデ、内面調整はヨコハケ後に横位ナデを加える。

22は19と同一個体の、上屋根下半部である。粘土紐巻上げ成形で、コーナー部を持つので、母屋部分となる。外面調整はヨコハケ（5本／0.8cm）、内面調整は斜位の強いユビナデである。

23は19と同一個体の下屋根隅角部である。池の注記がある。報告書に掲載があるが、便宜的に実測図を掲げておく。粘土紐巻上げ成形であり、隅角部は丸みを帯びている。壁体部に連続して屋根を成形し、軒部を貼り付け、粘土塊を挟み込んで補強する。軒の縁には幅2.5cmの凸帯を貼り付けて押し縁を表現する。その上面は簾状文的なヨコハケによって装飾が施される。また、屋根の隅角稜線上と壁体隅角部には幅の狭い凸帯を貼り、押し縁と隅柱を表現する。屋根部の外面調整はナメハケであるが、傾斜方向の異なるものを交互に施した部分がある。内面調整は壁体部ではナメハケ（9本／1.8cm）、屋根部では斜位の強いユビナデである。

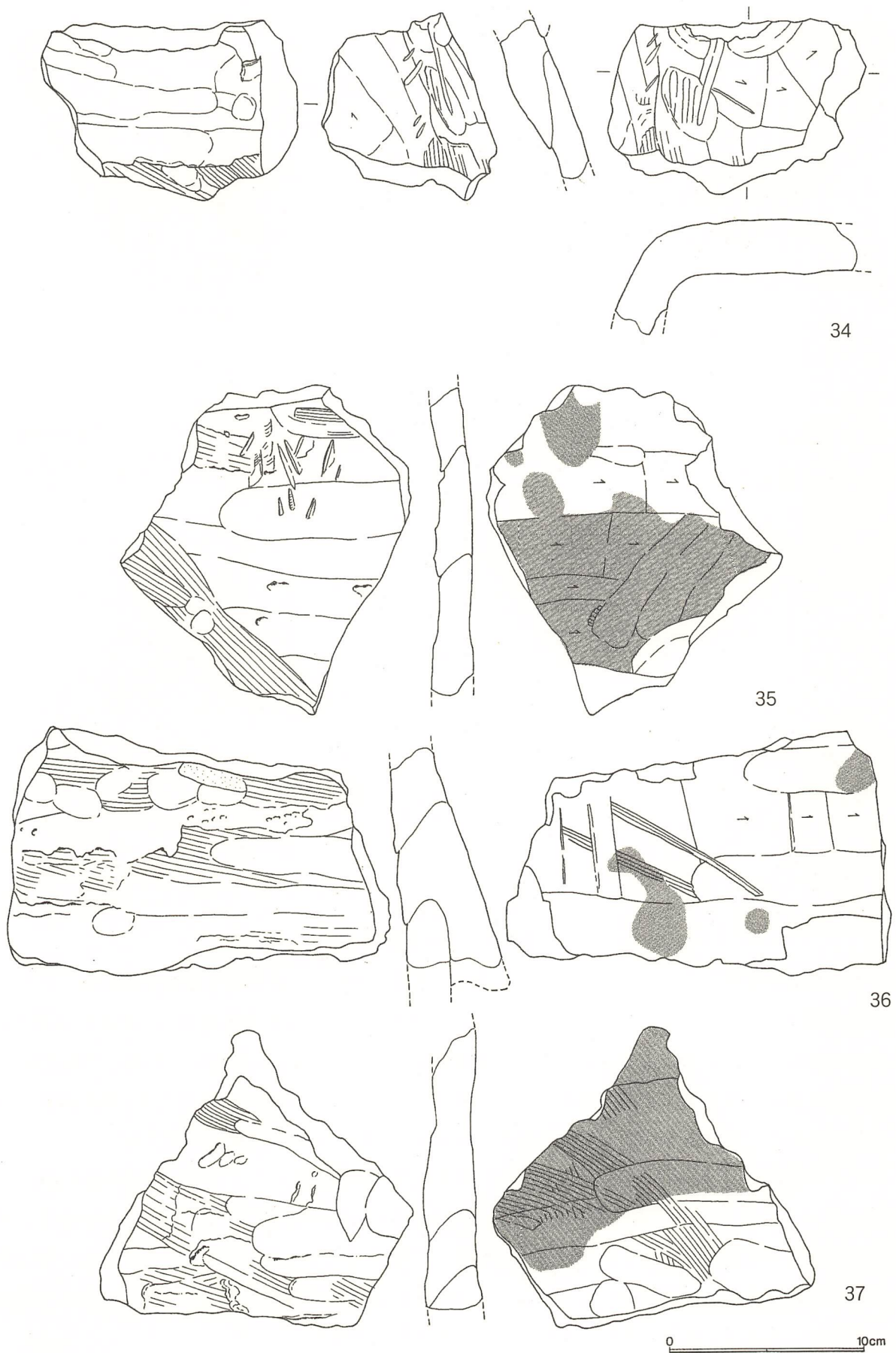
24は19と同一個体の、方形窓を持つ壁体部である。池の注記がある。粘土紐を何本か貼り合わせ板状にしたものを接合する板造りである。内面にはその接合痕が明瞭に残る。直交して縦横に凸帯が貼り付けられるが、縦方向が高く、横方向が低いので、柱に臍を切って横木を組んだ表現と推定される。方形窓はヘラ切りで、角から縦方向に8.5cmが残存する。外面調整はナメハケ（9本／1.9cm）、内面調整は斜位のユビナデで、上部にはナメハケが残る。

25は19と同一個体の、壁体隅角部である。池の注記がある。粘土紐巻上げ成形で、隅角は鈍角に曲がる。隅角に凸帯を貼って隅柱を表現し、水平方向にも低い凸帯を貼って横木を表現する。外面調整はタテハケ（10本／1.8cm）、内面調整はタテハケを斜位のユビナデで擦り消している。

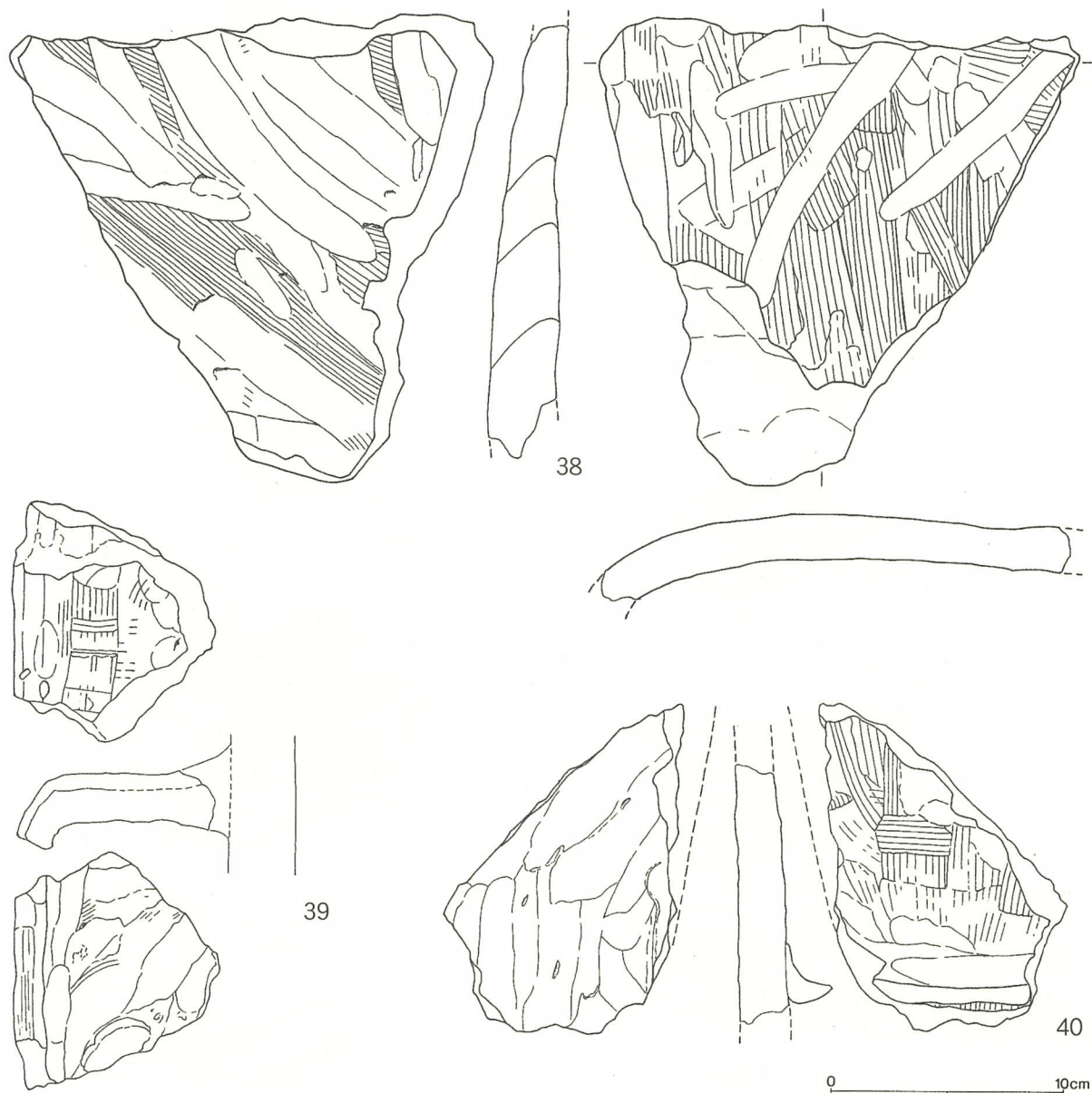
26は19と同一個体の、壁体部である。池の注記がある。24と同じ板造りであり、外面に接合痕が残る。下部に高い凸帯が貼り付けられており、器台部との境界を示す幅の広い張り出し部となる。外面調整はナメハケ（8本／1.7cm）、内面調整は縦位のユビナデである。

27は壁体部である。池の注記がある。粘土紐巻上げ成形で、内面に接合痕を残す。外面には縦横に凸帯を貼り付けるが、順序は縦方向が先である。外面調整はタテハケ（8本／1.5cm）、内面調整はナメハケ（6本／1.5cm）である。胎土には粗砂を少量含み、白色パミス、長石が観察される。焼成は普通で、色調は表面が赤褐色、器肉が灰褐色を呈する。

28は壁体隅角部である。池の注記がある。報告書に掲載されているが、天地が逆であったので、再実測して訂正しておく。粘土紐巻上げ成形であり、隅角部は丸みを帯び、内面に接合痕が残る。外面には水平方向の凸帯を貼り付けて調整した後に、隅角部に縦方向の、より高い凸帯を貼り付けている。隅柱と横木を表現すると推測される。水平凸帯の上側に接して1個所の方形窓がヘラ切りされている。外面調整はタテハケ（7本／1.5cm）を2回施す。内面調整は斜位ユビナデである。凸帯の調整は粗い布目条線を伴う。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色パミス、長



第10図 家形埴輪実測図7



第11図 家形埴輪実測図7

石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、色調は表面が橙褐色、器肉は暗灰色を呈する。

29は屋根軒部である。造出部4Tの注記がある。壁体に連続して屋根を成形し、断面三角形の粘土を貼り付けて出の小さな軒を表現する。外面調整はナナメハケ後に、横位ナデを加えて擦り消す。内面調整は横位ナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色パミス、酸化鉄粒、長石が観察される。焼成は良好で、外面は橙色、内面は赤褐色、器肉は茶褐色を呈する。

30～32はよく似た特徴を持つ堅魚木で同一個体に伴うものであろう。30は昭和58年表面採取、31は10Tと5T1区2層、32は11T表土の注記がある。31のみが完形品で、長さは11.3cmある。両端部は断面形が円形で、中ほどがやや細く、大棟との接合面は緩やかな曲面をなしている。粘土棒を転がして円筒形にし、両端を板に押しつけて整形し、ユビナデ調整で仕上げている。胎土は細砂を少量含む。焼成は不良で、軟質である。淡い赤褐色を呈する。

33は屋根軒部である。内堀の注記がある。壁体部に柱を表現したと見られる凸帯を貼り付け、水



平方向にも補強用粘土を貼り付けてから、軒部を接合している。外面調整は斜格子状の装飾的なナメハケ（7本/1.2cm）、内面は強い横位ユビナデである。胎土には粗砂を少量含む。焼成は良好で、淡い赤褐色を呈するが、器肉は灰色である。

34は寄棟造り家の屋根隅角部である。6 T 2 区北拡の注記がある。粘土紐巻上げ成形であり、隅角部は丸みを帯びる。外面上部に弧状のユビナデ痕があり、上端には妻隠し板が付いていたと推測される。外面調整はタテハケ後に、斜位のヘラケズリを加える。内面調整はナメハケ（8本/1.3cm）で、天井部には閉塞用の粘土を貼り付けている。胎土は粗砂を少量含み、白色パミス、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、外面は乳白色、内面は灰褐色、器肉は暗灰色を呈する。

35は34と同一個体の屋根部である。勾配不明のため、平置き実測した。6 T 1 区表土攪乱の注記がある。分厚い造りで、外面調整はナメハケ後に横位ケズリを加える。内面調整は強いユビナデ後にナメハケを部分的に施す。外面に赤彩が残る。

36は34と同一個体の屋根軒部である。6 T 2 区北拡の注記がある。器肉2cmを超える分厚い製作である。壁体の上端部を挟むように軒を接合し、連続的に勾配の急な屋根を成形する。外面には赤彩が部分的に残る。外面調整は横位ヘラケズリ、内面調整はヨコハケ後、横位ユビナデである。

37は34と同一個体の壁体部である。6 T 1 区表土攪乱の注記がある。粘土紐巻上げ成形で、内外面調整はナメハケ後、横位ナデである。外面には赤彩が残る。

38は34と同一個体の壁体部である。5 T 2 区表土の注記がある。粘土紐巻上げ成形であり、隅角付近では丸みを帯びている。外面調整はタテハケ（10本/2.2cm）後に部分的なユビナデを加える。内面調整はナメハケ後、斜位の強いユビナデを加える。現存部下端は厚さが3cmに増しているの、基底部付近となろう。

39は34と同一個体の基底張り出し部である。5 T 2 区表土の注記がある。壁体への接着部を欠くが、残存長は8.5cmあり、先端部は下方へ屈曲する。外面調整はヨコハケ、内面調整は斜位ユビナデで、端部はヨコナデである。ユニットとして製作したものを取り付けたと推測される。

40は入母屋造り家の上屋根部である。無注記である。勾配不明のため、平置き実測した。下端に補強用粘土が水平に貼られており、下屋根との境界に付く凸帯がこの下にあったと推測される。左側端面には接合面が残っており、破風板が取り付けいていた可能性が高い。外面調整はタテハケとヨコハケが組み合わさされており、網代表現と推測される。内面調整は縦と斜位のユビナデである。胎土には少量の砂を含む。焼成は良好で、外面は黄色味を帯びた淡褐色、内面は茶褐色を呈する。

## おわりに

今回報告した家形埴輪については、少しずつ復原作業を進めており、今年度最後の収蔵品展には、とりあえず1棟を公開する予定である。他の個体についても、引き続き復原を行う計画なので、家形埴輪の復原案を次号に公表したい。稲荷山古墳にはほかにも、未公表の人物埴輪や動物埴輪が多数残されているので、その資料化についても今後の課題として努力していきたい。



1平



1妻



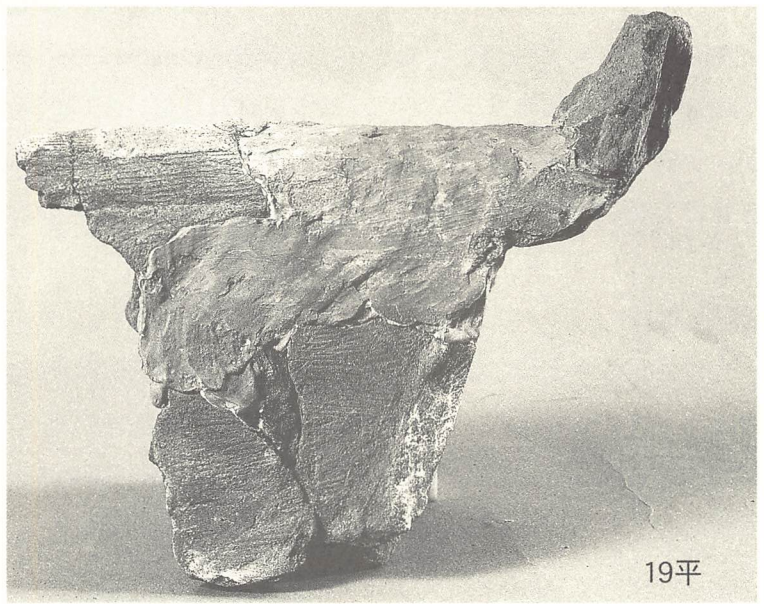
1妻内面



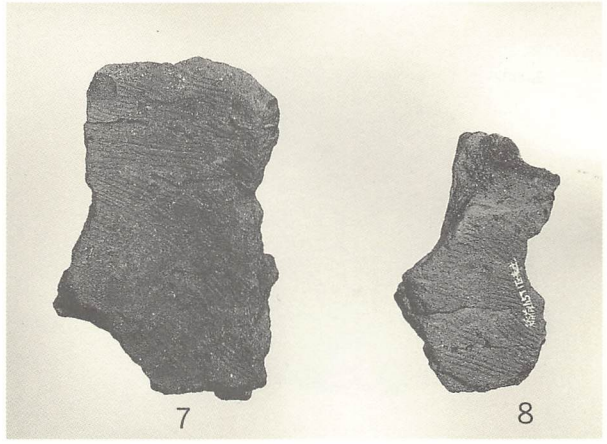
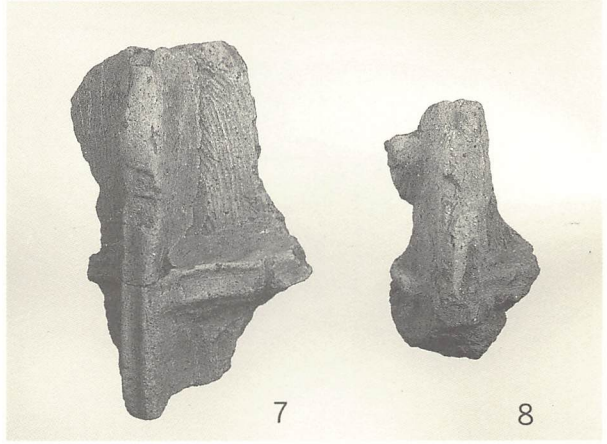
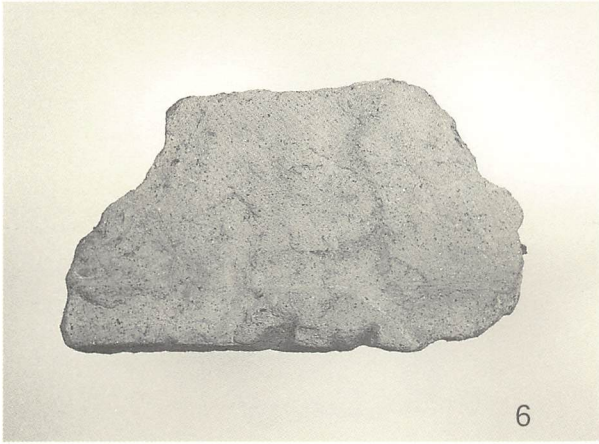
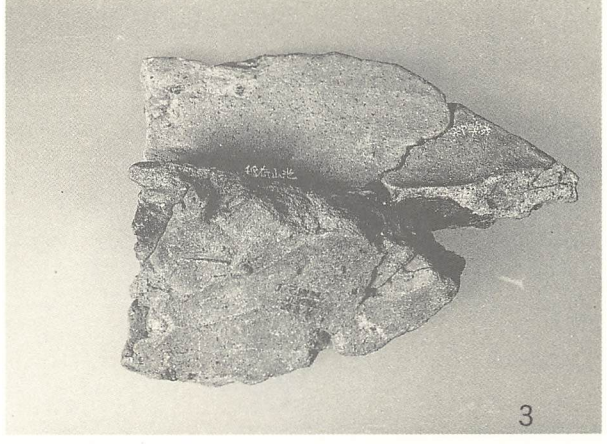
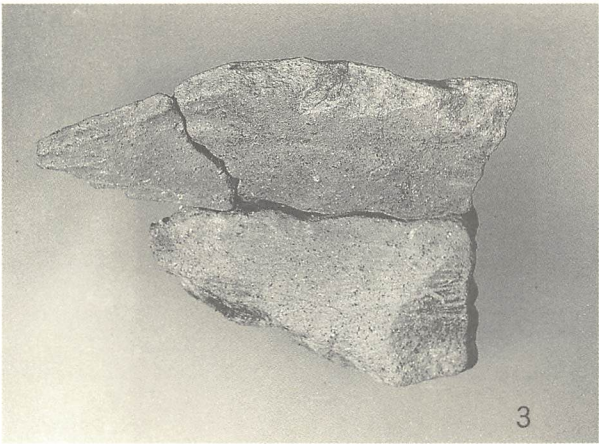
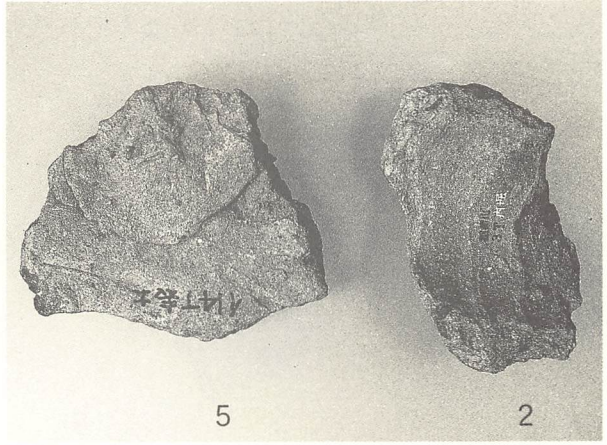
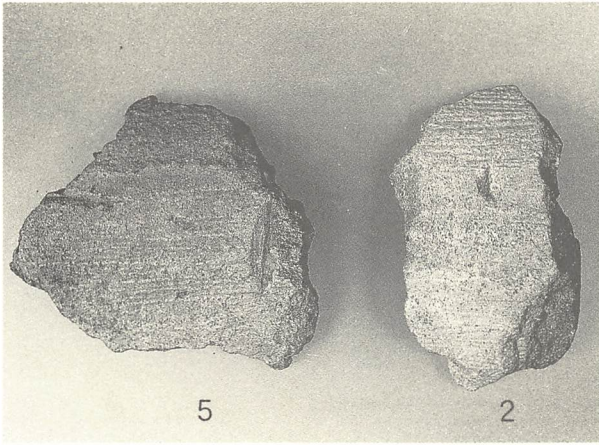
19妻



19棟

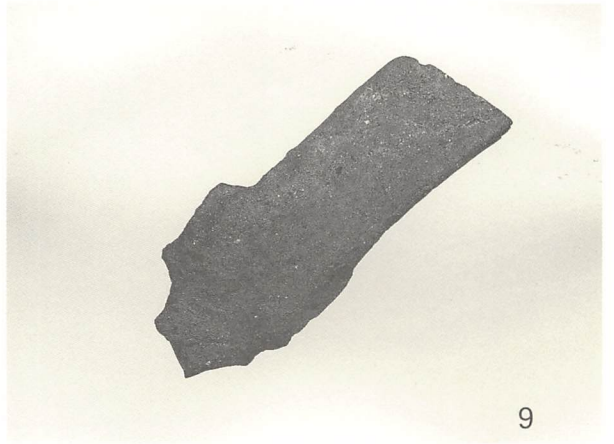


19平

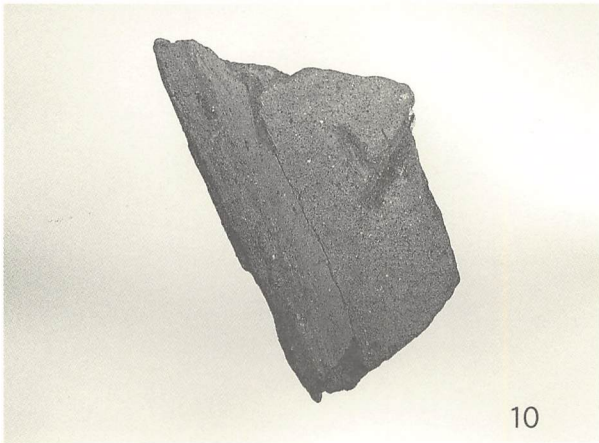




9



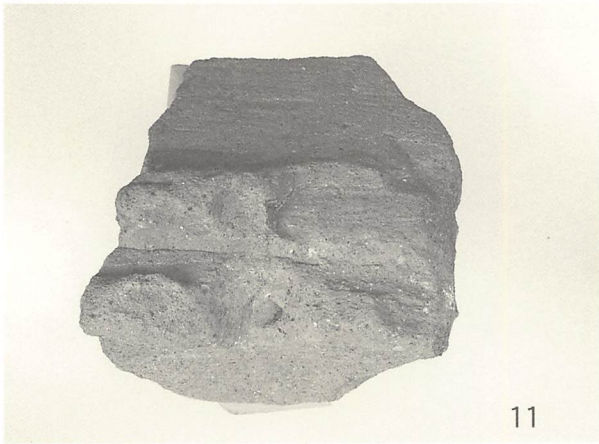
9



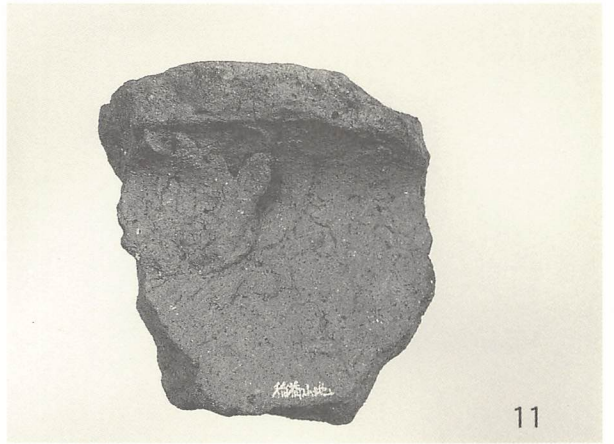
10



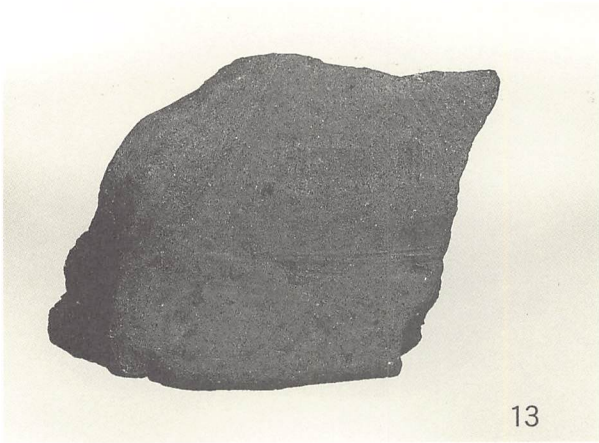
10



11



11



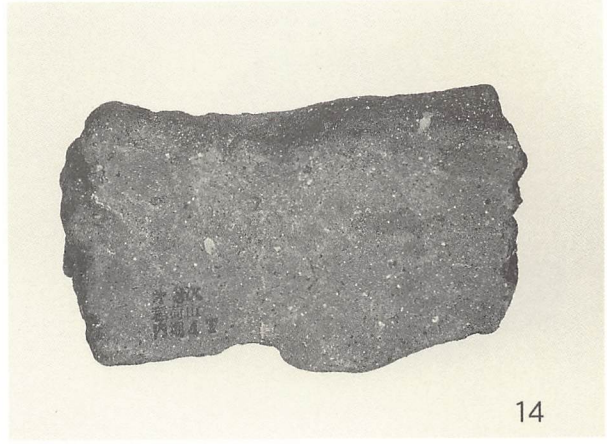
13



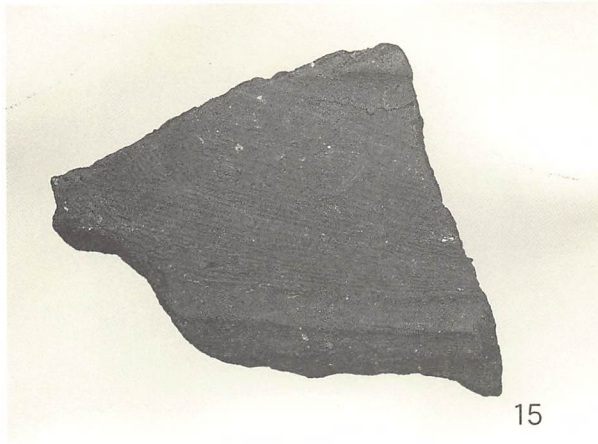
13



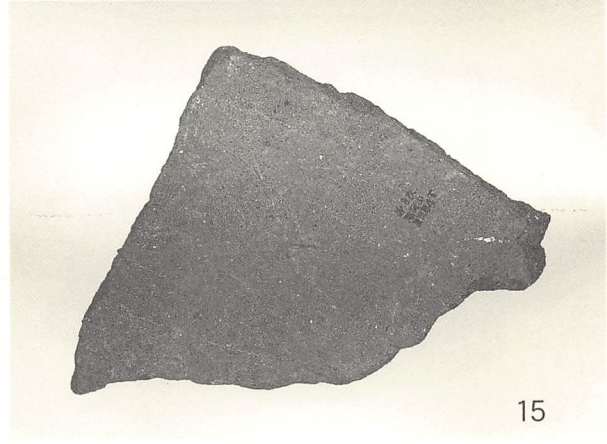
14



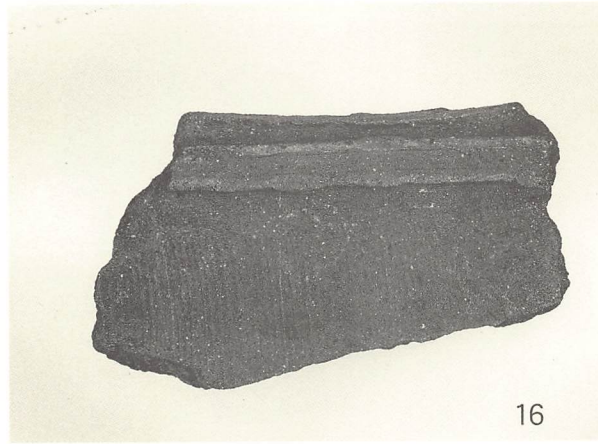
14



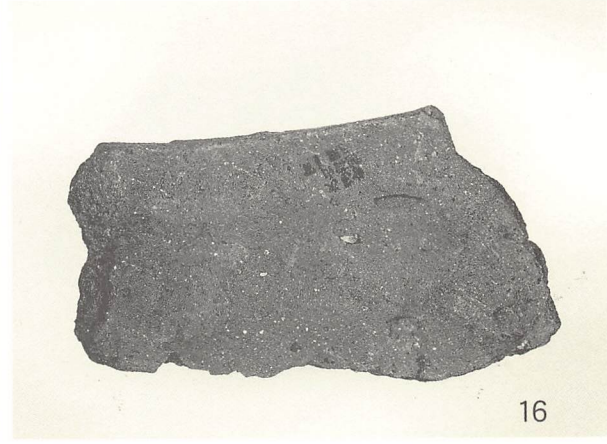
15



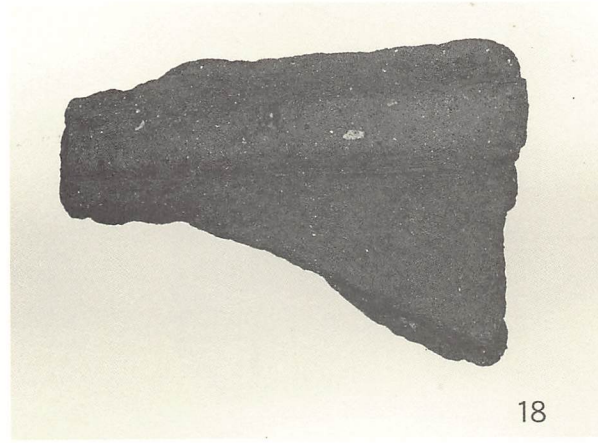
15



16



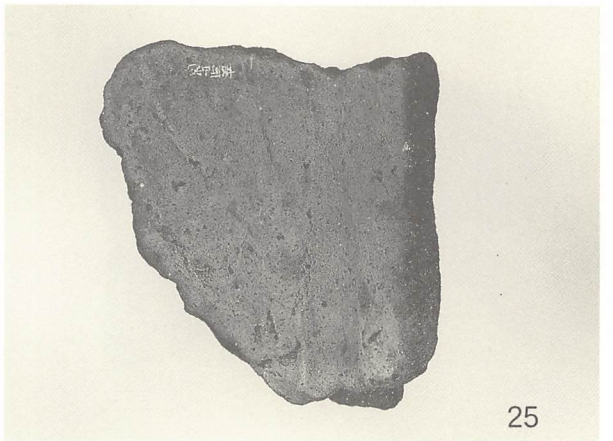
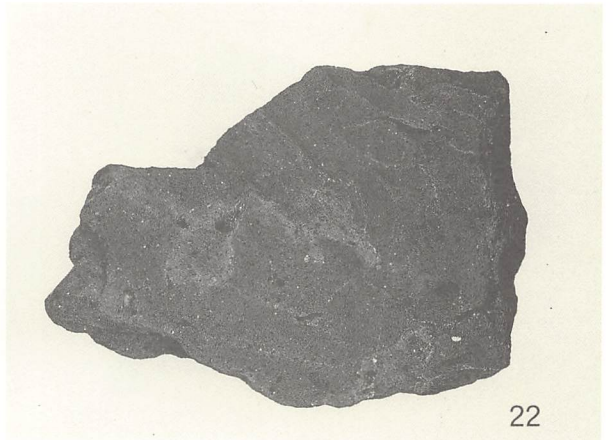
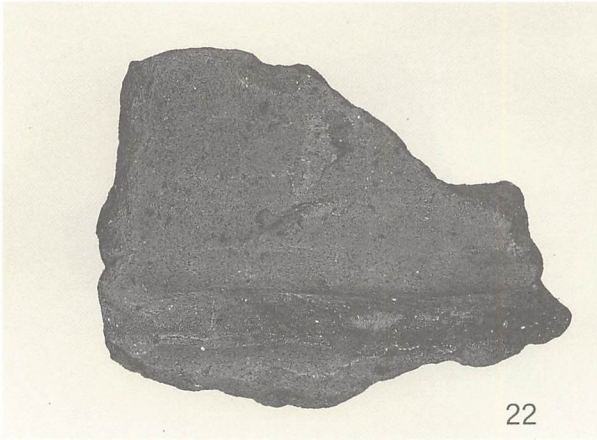
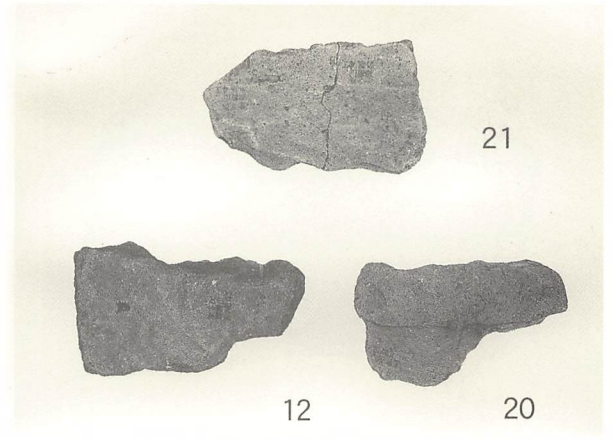
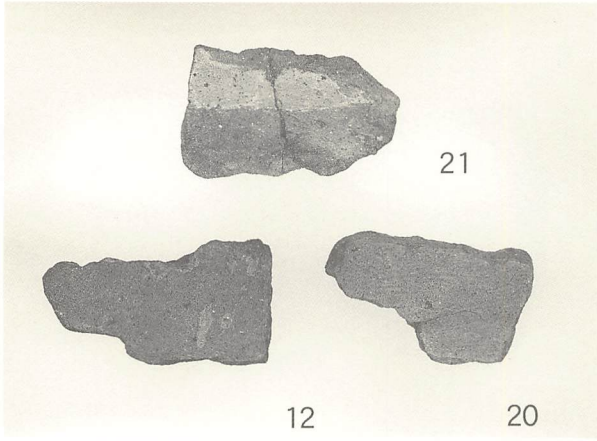
16



18

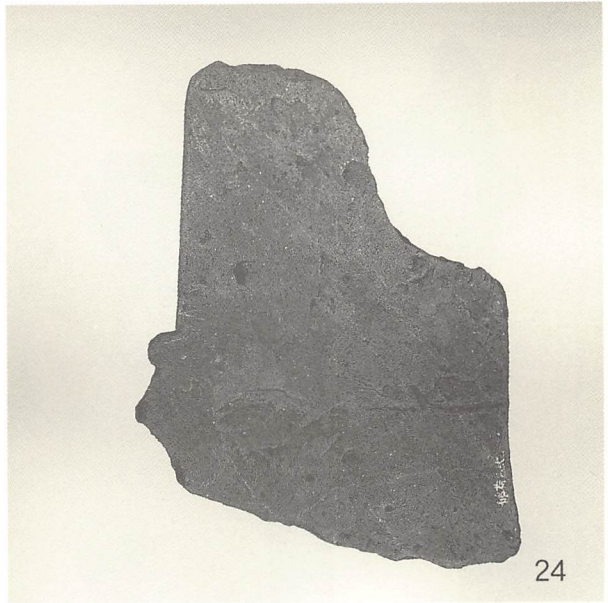


18





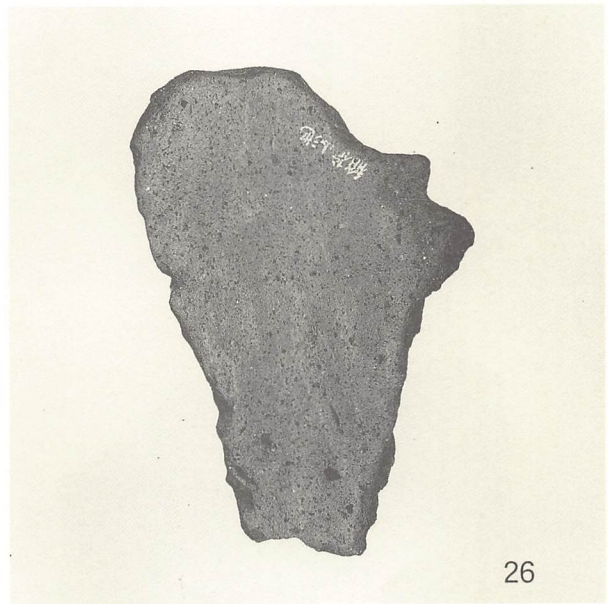
24



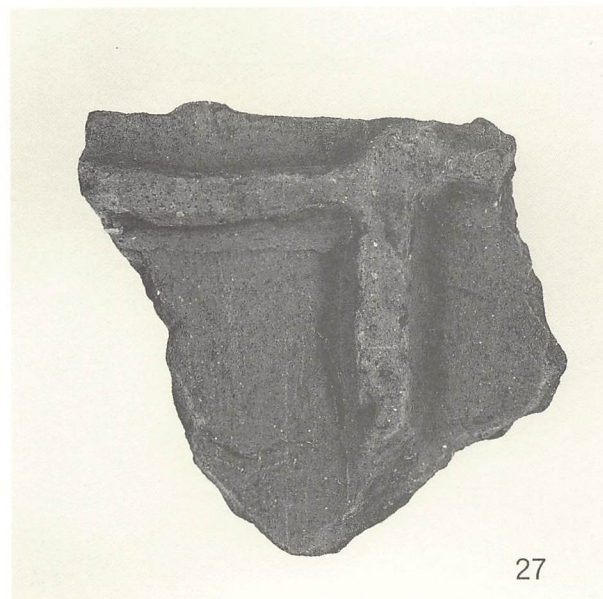
24



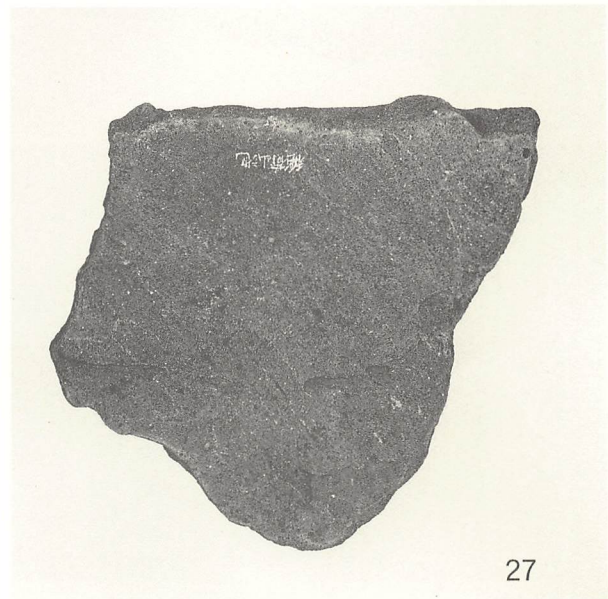
26



26



27



27

